

一億総活躍社会に関する総理と20代若者との懇談会
議事要旨

(開催要領)

1. 開催日時：平成27年11月6日（金）15:00～16:00
2. 場 所：官邸4階大会議室
3. 出席者：

安倍晋三	内閣総理大臣
加藤勝信	一億総活躍担当大臣
塩崎恭久	厚生労働大臣
須藤聡美	埼玉大学経済学部経済学科 4年
水口麻那	上智大学外国語学部イスパニア語学科 4年
田中 啓	日本工学院専門学校 4年
青木光信	認定NPO法人 育て上げネット若年支援事業部 ユースコーディネーター（臨床心理士）
川崎由季子	内閣府子ども・子育て本部
小林陽菜	私立高等学校教員
清水拓摩	トヨタ自動車（株）
伊藤美緒	（学）中西学園名古屋製菓専門学校
加藤雄大	大手商社勤務
小林佐知	地域おこし協力隊（長野県長野市）
村上太一	株式会社リブセンス代表取締役社長
坪内知佳	株式会社 GHIBLI（ギブリ）代表取締役

(議事次第)

1. 開会
2. 内閣総理大臣挨拶
3. 若者からの発言
4. 意見交換
5. 内閣総理大臣まとめ
6. 閉会

(概要)

○加藤一億総活躍担当大臣 ただいまから一億総活躍社会に関する総理と20代の若者の皆さん方との懇談会を開催させていただきたいと思います。

今日の懇談会では、一億総活躍社会について20代の皆さん方から色々と御意見を伺い、これから作成いたします「ニッポン一億総活躍プラン」の中に反映していきたいと思っております。

私は、一億総活躍担当大臣の加藤でございます。よろしくお願い申し上げます。

それでは、最初に安倍総理から御挨拶いただきたいと思います。よろしくお願いたします。

○安倍内閣総理大臣 皆さん、こんにちは。

安倍政権にとって大きな課題とする一億総活躍社会をつくっていくということを宣言したわけでありますが、先般、そのために国民会議をつくりました。我々は活力ある社会を次世代に引き渡していきたい。そういうことを申し上げているのですが、そういう会議等に次世代が入っていないではないかという批判がございまして、今日はまさに次の世代の皆さんにこうして参加していただきました。

ちょうど私が皆さんと同じぐらいのとき、日本の人口は1億1,000万人から2,000万人になっていったころでありました。高度成長ではないですけども、まだ活力を相当持っていました。この一億総活躍は絶対に頑張らなくてはいけないということではなくて、色々な立場の人たちがそれぞれの能力を活かすことができる、あるいは自分のやりたいことができる社会をつくっていくことなのです。若い皆さんもお年寄りも男性・女性はもちろんですが、障害がある人や難病がある人も、あるいは何回か失敗を重ねてきた人、そういった皆さんにもチャンスがあって、一歩前に出ることができる。それぞれのよさを発揮できる社会をつくっていく。そのためには、色々な障害がありますが、こういう障害を我々は取り除いていこうということになります。

今日は、皆さんに色々な立場で色々な経験をしてきていると思います。そういう皆さんから忌憚のない意見を、こういう雰囲気ではなかなか忌憚のない意見は言いにくいのですが、それを乗り越えて、忌憚のない意見を言っていただいて、実りある場にしていきたいと思います。

皆さんの意見を吸収しながら、政策の立案に活かしていきたいと思っております。よろしくお願いたします。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

また、今日は塩崎厚生労働大臣にも出席をいただいております。そして、12名の20代の皆さんに御参加いただいております。ありがとうございます。

では、時間の制約もありますから紹介も省かせていただいて、順次それぞれ御意見をいただきたいと思います。

最初に総理のお隣の須藤さんから願いたします。

○須藤氏 埼玉大学経済学部4年の須藤聡美と申します。

大学ではマーケティングのゼミに所属しておりますして学んでまいりました。

まず、お話ししたいのは、就職活動についてということで、就職活動が私たちの代では解禁が遅くなり短期化するということでしたが、実際、私自身は1年弱という長い戦いとなりました。就職の解禁が遅くなるからこそインターンが重要だという噂を聞いて、積極的に前半はインターンに参加などをしていたのですが、後半の本番が始まってから疲れ切ってしまう、もうちょっとペース

配分を考えて行えばよかったなというのが個人的な反省点でした。

また、就活を制するのは情報が鍵だということをととても感じました。企業によっては解禁前に始めているところも多くありましたし、守っているところもあって、裏を探るようで自分もどこで本領を発揮していいのかがわからなくなってしまうこともありました。

また、インターンが重要だということでお話ししましたが、インターンで活躍するためには、もっと前の準備も必要であったので、実質インターンで勝ち取った人は2年ほど頑張っていたのではないかと思います。

また、私自身は国立大学ということで、大学のほうでのサポートも遅めに今回は始まっていたのですが、インターンに参加して私大生の方とお話しすると、私大の方はもっと前から、去年と同じようにサポートがありOBもたくさんいて、情報をたくさん持っているような感じがして、そこはちょっと不平等だなということも思いました。

就職活動は自分的には、客観的に自分自身を見つめるいい機会とはなりませんが、私自身がそこまで立派なことをやってきていないのに、立派なようにお話をして、そういったところは心苦しいなと感じていました。また、自信を持って発言しないまま、自分をかばったまま発言して受かったとしても、そのまま私は社会できちんと活動していけるのかどうかということと、正直にありのままをお話しして雇ってもらえなかったらどうしようかという不安で毎日苦悩しておりました。

就職活動を通して一番大事だなと思ったのが、常に目標を持って本気で何事にも取り組んでいて、自分が変わって周りも変わって結果を出す、そういう自信を大学時代につけていくことが大事なものだったのではないかと思います。

これからの日本に期待することを簡単にお話しさせていただきます。難しいことはお話しできないのですが、大学生という視点からお話しさせていただくと、就職活動を通して文系の大学・大学院がきちんと評価されていないように感じました。企業の方は文系学生が大学で学んでいることにそんなに期待をしていないと感じて、大学生自身も大学でやっていることが社会に活かされる、特に文系学生にとって活かされるといった強い認識を持って勉強していたかというところではないと感じます。このずれをなくしていくことが、若者が活躍するには必要なのではないかと思います。

学生自身が意欲的に学んで未来につなげていくことで、何か実感が持てるようなものが需要かと思えます。諸々の評価対象や評価基準をもっと明らかにして、大学生が社会や企業の方から学んでいることをもっと認められるような環境づくりが私は必要だと感じました。

以上です。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

続いて、水口さん、お願いいたします。

○水口氏 上智大学外国語学部イスパニア語学科4年の水口麻那と申します。

大学ではこれまでスペイン語と国際関係を中心に学んでまいりました。また、昨年度にアルゼンチンに9カ月間交換留学生として留学してきました。

今年の就職活動において苦労した点は、企業側の採用活動が結果的に長期化したことによって、学業に集中することができなかった点です。具体的には、前期に履修したい授業がたくさんあったにもかかわらず、やむを得ず履修する数を減らさなければならなかったこと。また、卒業論文の執筆を始める時期が遅くなってしまったことが挙げられます。

また、長期化によって大手企業の採用活動が始まる8月まで体力とモチベーションを維持することが大変で、就職活動をやめてしまおうかと思ったことが何度かありました。

この反面、長い時間をかけて多くの社会人の方々とお会いできたことは非常によかった点だと考えます。彼らの仕事に対する様々な思いを聞くうちに、私は将来何がしたいのか、どういった社会人になりたいのかをしっかりと考え、その上で面接に臨むことができました。

今後の夢は、まず、仕事の面では中南米のいずれかの国に駐在して、現地で新規事業を興すことです。この夢を実現することで、日本と中南米双方の豊かな暮らしに貢献したいと考えています。また、プライベートの面では家庭と仕事を両立する働くお母さんになりたいです。

そして、その夢を実現するためにこれからの日本に期待することは、私のように総合職として継続的にキャリアを積みたいと考える女性が働きやすい環境が今以上に整備されることです。就職活動をしていたときに、制度として育児休暇制度はあるものの実態としてはほとんど取得されていない、また、育児が落ち着いた後に職場復帰をする女性がほとんどいないという企業がありました。

一方で、男性の中にも一般職として働いて、プライベートを充実させたいと考える人が少なからずいるのに対して、実態としては一般職での採用はほぼ例外なく女性だという点も残念に思います。

このような状況が変わって、誰もが自分に合ったスタイルでキャリアプランを描くことができる日本になることを期待しています。

以上です。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

続いて、田中さん、お願いいたします。

○田中氏 日本工学院専門学校建築学科4年の田中啓と申します。よろしくお願いたします。

就職活動についてなのですが、まず、私が就職活動をする上で一つ念頭に置いておいたことがあります。それは、自分自身の夢でもあるのですが、職人になるというのが僕が就職活動をする上で念頭に置いていたことです。

きっかけといたしましては、自宅をつくっている光景を間近で見たときに、つくっている職人さんの姿を見て、雷に打たれたかのような感覚を覚え、格好いい、すごいと思い、こういう仕事につきたいと思って小さいから夢見て、今まで活動してきました。

高校も工業高校に入学させていただいて、そこで建築という基礎を学んで、それから日本工学院のほうに進み、今、就職氷河期ということでなかなか難しいところではあると思うのですが、無事に7月に内定をいただくことができました。

就職活動をした上での苦勞のところなのですが、専門学校という立場なので、少し大学生より下に見られてしまうというのが就職活動をする上で感じたところです。企業側の出しているボーダーを見てみると、大学生・大学院生、この就職募集要項がかなり多めにあったので、ちょっとその辺は苦勞したところです。

でも、僕の考えといたしましては、大学生も確かに学力的には僕らよりも勝るところがあると思います。しかし、専門的な分野、建築、機械、電気、その他諸々ありますが、そういう面では専門学校やそれを専攻してやっている学生のほうが、僕のほうがその知識があると思っています。

最後に、これからの社会に期待することといたしましては、私は夢というものを追いかけてこれまで就職活動、日常生活を送ってきました。特に、夢を実現させたというのは周りの環境もあったと思います。家庭環境もそうですし、社会の環境もあると思います。

私が期待することといたしましては、色々な事情で夢を諦めなければいけない方が数多くいると思うので、夢を諦めない、夢を諦めずに真っすぐ進んでいける社会と環境をこれからの日本に期待いたします。

ありがとうございました。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

次に、ニート支援を行っておられます青木さん、よろしくお願いいたします。

○青木氏 認定特定非営利活動法人育て上げネットの青木光信と申します。本日はよろしくお願いいたします。

私は、大学・大学院を通して6年間臨床心理学を学んできました。そして、2年前にやっとの思いで臨床心理士資格を得ることになりました。

また、学生時代を通して7年間のアルバイトの経験と、大学を卒業してから1年半は民間企業で正社員として働かせていただいた経験があります。大学で得た知識とアルバイトと民間企業での正社員の経験、仕事に必要な事柄の経験を活かして今の若者の就労支援に携わっています。

今後の夢や希望についてなのですが、その点に関しましては、若者の就労支援に加えまして、若者たちが仕事につけないという状況の予防へのアプローチをしていきたいと考えています。

それは日ごろ就労支援を行って行く中で、早期にアプローチができていれば利用されている方々の支援の期間が短くなったりですとか、そもそも支援の必要がなかったのではないかという方が多く見受けられますので、そういったところで予防的なアプローチを心がけていきたいと考えています。また、こういった社会ですと人間関係から離れている期間が長ければ長いだけ、こういった就労への支援の期間が長くなってしまいますし、その予防ということで支援を必要とする状況の回避ということにつながってくるのではないかと感じています。

そして、予防の一環として、今後の社会に期待する点としては、そういった人生の岐路に人々が立たされたときに、相談や支援を受けることが恥ずかしいですとか、劣等感を抱いてしまうといった風潮がない社会を築いていけたらと感じています。やはりそういった風潮の中で、誰にも相談せず一人で困っていることがさらなる事態の悪化につながってしまうのではないかと感じています。

また、実際に支援をしていて、加藤大臣に強くお願いしたいことがあるのですけれども、私どもの支援している若者ですとか、子供たちの中には、実際に支援・相談を受けるコストですとか、支援を受ける場所に行くための交通費、インターネットにアクセスする環境がないといった実費の負担が払えない若者が多く見受けられます。そういった若者たちが支援を受けられるような実費給付型の支援制度の立案について強くお願いしたいと思います。

以上です。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

続いて、子育て中の2人ではありますが、まずは川崎さんから。

○川崎氏 内閣府子ども・子育て本部の川崎と申します。

私は昨年12月に出産し、今年4月に復職しました。子供は生後3カ月から地元で新しくできた保育園に預け、フルタイムで働いています。

夫は民間企業で営業職をしており、復職直後は保育園の送迎や家事を分担していましたが、現在夫は半年間の海外赴任となり、保育園の送迎など全てを私が行われなければいけなくなりました。

そこで保育園の送迎のために1日1時間まで休みをとれる保育時間制度や子供が病気をした際の看護休暇などの人事制度を活用し、育児をしながらも仕事を続けられています。

しかし、子供が体調を崩し夜泣きがひどいときなど、睡眠不足から体力的な限界を感じるとともに、育児に専念できない罪悪感や職場に迷惑をかけているという焦りから、仕事と育児の両立はつらいとすることがあります。

また、20代のうちに出産したことで、若手のうちに経験すべきとされている膨大な業務を抱える主要なポストは残業ができないことから就くことができず、今後のキャリア形成への不安もあります。

一方で、早いうちに育児休業から復職したことで、キャリアの空白期間を短

くできたこと、限られた時間の中で最大限仕事をしようとする業務の効率化を早い段階で意識できたこと、保育園の保育士さんや育児を経験した先輩職員からアドバイスやフォローをいただきながら子育てができることが大きなメリットとして感じられています。

何より、保育や児童手当など、制度を利用する側の視点を持ちながら企画立案を行い、行政官として社会に貢献できることに達成感や誇りを感じています。

このような経験から仕事と育児の両立は職場における多様な働き方を許容する人事上の制度の構築や環境づくり、行政による保育サービスなどの子ども・子育て支援の量の拡充と質の向上、また、各個人の意欲の向上や効率性アップへの努力といった複合的な支援や努力があって実現するものだと思います。

一億総活躍社会では、社会全体で子育てを支援し、誰もが仕事と子育てを諦めることのない社会になってほしいと願い、その実現の一助になるよう、今後も仕事と育児の両立に取り組みたいと思います。

以上です。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

続いて、小林さん、お願いいたします。

○小林陽菜氏 初めまして、小林陽菜と申します。

私は、現在育児休暇中で生後6カ月の子供を育てている27歳です。

神奈川県で生まれ育ち、音楽大学を卒業後は長年の夢であった私立高校の教職員として働き、妊娠中は体調が安定せず、長期にわたって仕事を休むことを余儀なくされましたが、職場の理解や協力に恵まれ、現在は慣れない育児に奮闘しながらも、無事に生まれてくれた娘と過ごす日々幸せを感じています。

母親になり一番驚いたことは、出産や育児に関して相談できる場所が少ないことです。妊娠中から自分なりに調べてきましたが、育児をしていく中で出ていく質問や子供の成長や発達について気になることなど、実際に出産して育ててみてからでないといけないことも多く、1人目ということもあり、思い悩んでしまうことも少なくありませんでした。

さらに、仕事の都合で実家を離れている私にとっては気軽に話せる相手が余りおらず、引っ越したばかりで地域になじみもなかったために、かかりつけの病院選びなどに最初はとても苦労しました。

育児休暇を取得し、私は母親として働き続けることの難しさを痛感しました。来年度より職場へ復帰することが決まっており、たくさんの保育園に空き状況を問い合わせたり、見学に足を運んだりしていますが、入園できるかどうか分からない中で子育てと仕事を両立することへの不安や焦りを感じています。

また、地域によっては妊娠中から生まれてくる赤ちゃんの預け先を探さなければならぬと聞き、待機児童問題の深刻さを改めて実感しました。

少子化が進む一方で、私と同じように子供を預けて働きたい人、結婚・出産によって一度は離職したものの、再就職を希望している人がたくさんいます。

共働きの世帯が増えている中で、今後より多くの若者が男女区別なく社会で活躍していくためには、企業の育児に対する意識の向上や時間短縮勤務などの柔軟な雇用形態、選択肢の多様化が必要になってくると思います。

子供を育てるということは、もはや家庭だけの問題ではなくて、未来を担う人材を育てるために社会全体で解決していかなければならない問題になっていると思います。課題は幾つもあると思いますが、子供からお年寄りまで安心して暮らせる社会になることを願っています。

以上です。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

次は、技能五輪国際大会に入賞者でありますお二人から、まず、清水さん、お願いいたします。

○清水氏 トヨタ自動車株式会社の清水拓摩です。

私は、昨年12月に行われた技能五輪全国大会自動車板金職種で優勝し、今年の8月にブラジル・サンパウロで行われた技能五輪国際大会に日本代表として出場し、金メダルを獲得することができました。

ものづくりの日本一、世界一を目指し、18歳から22歳の間技能五輪一筋、訓練を積み重ねてきました。

この訓練の中で苦戦したことは、頭で理解していても自分の手で実際に表現できないことでした。技能向上のためには何より経験が必要ですが、訓練できる時間が限られていたのにも苦労しました。また、競技する相手が見えず、常に自分との戦いとなり、精神的にかなりまいった時期もありました。このようなつらい日々が続きましたが、その分、大会を終えたときの充実感はとても大きかったです。

技能五輪を通じて得たものは、まず板金技能です。人を魅了するほどの技能を身に着けられました。そして、ものづくりのすばらしさです。楽しさや達成感が味わえるし、物事への好奇心もつくと感じました。また、本気で物事に取り組むことで得られるうれしさや悔しさ、周りの方々の協力はとても刺激的で、自分を成長させてくれ、人生の財産になります。訓練を繰り返す日々の中で反省することの大切さも学びました。つらいときに逃げずに自分の現状と向き合うことで、新しい方向性を見出したからです。

現在は、指導者として後輩に技能を伝えています。今までの経験があったからこそ自信を持って指導することができているし、私にしかできない指導になっていると思います。

今後は、モーターショーやコンセプトカーの製作にかかわりたいです。自動化が進んでいる産業ですが、人の手によって仕上げられた世界に一台の車は人を魅了し、感動を与えます。それに携われるのは夢のようなので、ぜひ挑戦したいと思っています。

今回の一億総活躍社会についてですが、日本の産業を支えているものづくり

を周知してもらふ必要があると考えます。韓国では、スポーツのオリンピックと同じように技能五輪が注目されています。日本の産業発展のために高度な技能の伝承が必要であると考えられる中、若者のものづくり離れ、技能離れという言葉をよく耳にします。やはり今後を担っていくのは若い世代のはずです。まずは一人でも多くの人にもものづくりのすばらしさ、楽しさを知ってもらふ環境づくりが必要だと考えます。勉強が得意な人、スポーツが得意な人がそれぞれの分野で活躍できるように、ものづくりで世の中に貢献したいと思う人が増える社会を望みます。

以上です。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

続いて、伊藤さん、お願いいたします。

○伊藤氏 名古屋製菓専門学校に所属しております伊藤美緒と申します。よろしくお願いいたします。

私も今年8月に開催された技能五輪国際大会の洋菓子製造部門に出場させていただきました。サンパウロで大会を行わせていただいた結果、銅メダルを獲得することができました。技能五輪国際大会では国内大会で行われる全国大会とは違い、お菓子をつくる材料だったり環境だったり設備など、現地のブラジルで使用するものを使わなければいけないというなれない環境での大会でした。

慣れない環境で練習もできないまま大会に挑むこととなりました。現地の現状を見て工程を練り直したりしたものの、当日はトラブルばかりで協議は4日間を通してトータル22時間で行われるもので、洋菓子製造ではあめ細工やチョコレート細工などの細工ものやプチガトーやボンボンショコラなどのケーキなど、6つの課題をつくり上げていきます。ですが、当日トラブルなどの関係もあり、どれも自分の納得いくものはつくり上げることはできませんでした。そういったトラブルに対応しながら何とかやり遂げることができました。

こういった対応ができたのも、自分が名古屋製菓専門学校に行かせていただいて、そういう技術を持った先生方に教えていただいた環境のおかげだと思っております。

私が通っていた専門学校は、今回の技能五輪国際大会に出場経験のある学校で今までの経験を全て私に伝えくださり、大会に挑むことができました。そういった自分の夢だったり、やりたいこと、目指すものに対して環境というものが重要になってくるなど今回の大会で経験しました。

自分がどれだけやりたいという気持ちを持っていても、実際にそういった環境にいなければ目指すことができなかつたものだと思います。夢や希望を持って活躍することのできる社会となるためには、そういった環境を整えていく必要があると思っております。なので、私も今回、こういったものを経験させていただいて、そういう経験を次の世代に伝えていける人になりたいと思っております。

以上です。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

次に、青年国際交流事業に参加経験のある加藤さん、お願いします。

○加藤氏 加藤雄大と申します。本日は貴重な機会を頂戴しましてありがとうございます。

私は現在25歳で、一昨年京都大学を卒業しまして、現在は総合商社で製鉄会社の皆さんとともに製鉄用の石炭の輸入に関する仕事に従事しております。

私は学生時代にちょうど一昨日総理が代表団の訪問をお受けになられました東南アジア青年の船事業に4年前に参加させていただきました。

たくさん貴重な経験をさせていただいたのですが、特に印象に残っていることは、船を通じてインドネシアを訪問した際に、ASEAN事務局の事務総長のお話を聞いた時のことです。私が参加したのは2011年という震災の直後だということもございまして、事務総長からはこれまでのASEANに対する日本の貢献への感謝と同時に、恩返しの意味を込めたこれからの復興に対する思いを語っていただきまして、日本のこれまでの諸先輩方が築いてきた信頼というものが非常に強いものだと感じましたし、また、これからを担う世代として、一層高めてまいりたいと思うきっかけにもなりました。

また、その事業への参加は私にとっては国際舞台への初めての挑戦ということもございまして、自分が国際人としていかに能力不足であるということを実感する機会でもございました。それはただ単に語学ができるできないというだけではなくて、異なる文化や宗教、価値観を持った人に対する理解が欠けていたことが大きかったように思います。

また、そういったことを感じましたので、継続的にそういった色々な文化と触れ合うことの重要性を感じまして、現在も内閣府の事業のサポート等を通じて継続的な接点を持つように努めておりますし、そういったものが商社で色々な世界の方々と働くに当たっても非常に役に立っております。

そして、今後につきましては、事業に参加したこともございまして、世界中に日本人のファンを増やしていきたいと考えております。事業を通じて学んだことではありますが、国と国との信頼関係といっても、基礎となるのは人と人との信頼関係であることを学びました。なので、まずは自分自身が今ある職場環境もそうですし、一人一人と信頼関係を色々な国の人たちとつくっていくことで日本の信頼を高められる、そういった人材になりたいと思っております。

そして、そういったことを踏まえてこれからの一億総活躍の日本に期待することといたしましては、私は内閣府から貴重な機会を頂戴いたしましたけれども、より多くの日本の方にもそういった機会を持っていただきたい。国際人として自分の今ある立場がどういったものなのかといったものを感じる機会、そして、色々な方たちと触れ合う機会をふやしてほしいなと思っておりますし、そのためには、国外にいかなくても、日本にいながらにしても多文化、宗教、価値観

と触れ合う機会がこれからの日本にはより一層必要になっていくのではないかと考えております。

以上でございます。ありがとうございました。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

続いて、地域の農業にUターンで従事されておられます小林さん、よろしく申し上げます。

○小林佐知氏 長野市の地域おこし協力隊として活動しています小林佐知と申します。

出身が長野市なのですが、大学は東京に進学しまして、農学部に所属して勉強していたのですが、もともと地元が好きだったというのと、勉強していた農業経営だとか開発農学に関わる仕事がしたいという思いがありまして、今年の7月、大学卒業する前からなのですが、協力隊として長野市の戸隠地区というところにUターンして活動しています。

長野市は、今協力隊員が21名いるのですが、私の場合は地域農産物の販売促進であったり、観光と連携した農業振興を支援するというのがミッションで地域に入っております。

ただ、実際に地域に入って感じているのは、販売促進にしてもそうなのですが、支援をする対象よりも支援される側の担い手となる人材が圧倒的に不足していることを強く感じています。

私の活動している戸隠は観光地でもありますので、直売所は幾つかあるのですが、午前中に品物が全て売り切れてしまったりとか、販売促進がミッションだったはずなのですが、需要の供給のバランス的には供給のほうが少ないというのが地域の現状で、一方で傾斜地が多かったりとか、冬は豪雪地域ですので、農業ができる期間が限られているのもありまして、もともと専業農家の方はほとんどいらっしやらないし、例に漏れず高齢化は進んでいますので、生産量自体も今も下がり続けているのが現状です。そのため、今、20代で地域に入っている私にかなり期待されているのは感じていますし、今後私だけではなくて、地域を牽引していける担い手になる仲間をつくっていかなくてはいけないと日々思っています。

私自身も今、農業研修を受けながら、来年度の4月から市民農園を運営するような団体の法人化に向けて準備を進めている段階です。社会に出たばかりなので、何をやるにも自信がなかったりとか、色々リスクとかを考えると足がすくむようなことが多いのですが、今は行政であったり地域の方に支援していただいて、協力していただいていますので、とにかく自分でできることをやってみて、前に進んでいくしかないのかなと思っています。

今後なのですが、市民農園を来年度から運営を開始しながら、農業生産と連携した飲食、宿泊も含めて観光と連携した農業振興を目指して事業を拡大していきたいと思っています。まずは一人でも農業に興味を持ってもらえるような

仲間を増やしていくことからなのかと思っています。

今回、一億総活躍社会の実現に向けてということで、社会に期待することという話があったのですが、正直、若者が社会で活躍ができるかできないかは、自分がやるかやらないかだと本当に思っていますので、最初の一步を踏み出すところの勇気が必要だったり、悩みがあったりというときに、私の場合は地域おこし協力隊の制度であったり、地域の方のサポートに後押ししていただいて今に至っていますので、そういった後押しの存在だったりとか、挑戦を受け入れるような社会の雰囲気は今後広がっていったらと思います。

以上です。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

続いて、インターネットで求人サイトを運営され上場された村上さん、お願いいたします。

○村上氏 こんにちは。株式会社リブセンス代表取締役の村上と申します。

私は、2006年、大学1年生（19歳）のときに会社を起こし、「成功報酬」「お祝い金」という新たなビジネスモデルで求人サービスを立ち上げました。2011年には、史上最年少で東証マザーズ・東証1部へ上場し、従業員数は現在約400人まで増加しております。

一億総活躍社会の実現に向けて、私自身の経験から2点大事だと思うことをお話させていただきます。1点目が夢を持つことと、それをサポートする仕組み。もう一点が、適材適所の促進です。

まず、1点目の「夢を持つこととそのサポートの仕組み」についてです。私の場合、小学校高学年のときに将来社長になりたいという思いを持ち、現在、それを実現できたというエピソードがあります。両祖父が経営者だったので、幼い頃から「社長」という仕事を身近に感じることができ早くから夢を持ってましたが、多くの学生はなかなかそういった夢を持つ機会がないのではないのでしょうか。社会に触れる機会が少なく、夢を改めて持つという機会、将来を考える機会が少ないのではないかと思います。また、私の場合、社長になりたいという漠然とした思いを、様々な経営者の講演を聞いたりすることで、より強固なものにしていきました。サポートについても、私は幸いなことに大学等がサポートしてくれたり、その他非常に優秀な経営者の方にメンターとしてサポートしてもらったりと、たくさんの方々に支えられた結果、夢の実現に至りました。夢の実現に当たってのサポート、多くの場合は、学校の教師等になるのかもしれませんが、夢を持った学生がしっかりサポートされ、新たな道を切り開く。そんなきっかけになるような教師等の素敵な人材をそろえていくことが大事なのではないかと思います。

2点目は「適材適所の促進」です。現在、新卒採用等で学生と会うことも多いのですが、多くの就活生に何をやりたいかと聞いてもなかなか答えが返ってきません。かつ、大卒で就職した後に約3年で30%が辞めてしまうというのが現

実です。学生時代から自身が何をやりたいのか、こういった職に向いているのか、就活よりももっと早い時期から自分の適性や将来について考える、様々な職業について学ぶ、そんな機会を与えていくことが必要なのではないのでしょうか。そういったキャリア教育は、適材適所の促進に当たって有効であると考えております。

当社は、求人サービスを手掛ける民間企業として、経営理念「幸せから生まれる幸せ」のもと、本業を通じて、適材適所の促進、適切なマッチングを実現していくことで、多くの人が活躍できる社会、多くの人が幸せを感じられる社会の実現に貢献してまいります。

以上になります。

○加藤一億総活躍担当大臣 どうもありがとうございました。

最後になりましたけれども、山口県において漁業の6次産業をされておられます坪内さん、お願いいたします。

○坪内氏 坪内と申します。よろしくお願いいたします。

私は、皆さんもそうだと思いますけれども、失われた20年と言われた世代の、就職活動が辛いからやめてしまうおうか、ネガティブな要素が非常に多い時代の中で育ってきたかなということをお自身が思っていて、なかなか自分に自信が持てず、自分の役割ですとかビジョン、ミッション、夢というものがなかなか見つからないということで非常に苦しんでしたのですけれども、子供ができたということもあるのかもしれませんが、山口県萩市の離島で、田舎の離島での暮らしを見たときに、日本の豊かさ、守らなければならないものとはこれだと思ひまして、当時漁業も6次産業の総合化事業計画というものができたところで、その事業に則って起業いたしました。

起業する中で、1次産業者とともに鮮魚の販売、直販を行いながら、地元の農協さん、漁協さんともちょっとでも仲良くできないかということで、調整役、パイプ役を回りながら、消費地と生産地のパイプ役を回りながら、調整をしながらこの事業を行ってきたのですけれども、なかなか1次産業者だけで6次化を行えるのか、今、地方創生とかありますが、6次産業化により地方に戻るとこの間もお話しさせていただいたのですが、なかなか生産者だけの自立は難しいのかなというところで、今、サポートを行っているのですけれども、私が全てサポートを行うのも難しいかと思ひます。

1点御提案としては、1次産業者に対する教育。田舎だから、離島だからというコンプレックスを非常に抱えているのです。知ることで、見えることで歩み寄れる部分、伸びしろも非常にあるのかなと。1次産業だから、田舎だから、大企業が伸びるよりも中小企業、農業者、漁業者が伸びる伸びしろは非常に大きいかなと思ひてこの事業を行っています。

先ほどの女性のキャリアをというお話なのですけれども、私もそのように思ひまして、弊社では事務所の隣で子供を寝かせて、女同士で子供を見合いなが

ら生産現場にも力を貸せるような体制と、中小企業はフレキシブルにできますので、そういった中小企業企業の利用という言い方が悪いですが、国として何らか今、中小企業家同友会という全国4万人のネットワークでの活動もしているのですが、ぜひそういった活動も利用していただきたいという御提案と、大企業に大学生が就職を求めていく流れも色々な中小企業があって、中小企業の大半が日本の経済を支えているといたらあれですけども、たくさんあるんだよということをもう少し周知できる場がないかなと思っております。

以上です。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

それでは、意見交換を行いたいと思いますが、最初に塩崎厚生労働大臣から。

○塩崎厚生労働大臣 厚生労働大臣の塩崎恭久です。

今日は、若い皆様方の元気な声を聞かせていただいて、ありがとうございます。

私、それから安倍総理の世代ぐらだと、割合単線型な生き方というか、就職とか働き方とかだったわけでありましてけれども、今、お話を聞いただけでも色々なバラエティーがあって、今日、夢という言葉が何度も出てきましたが、夢を持つというところではまだまだやらなければいけないことが我々もあるのだなということをつくづく思いました。

その複線型で、安倍総理が前からおっしゃっておりますけれども、再チャレンジができる、何度でも挑戦ができる、そういう国に本当に変わらなくてはいけない。しかし、それは支える、サポートという言葉も随分出ましたが、サポートするものが何もなしでいけるかということそれはそんなことはないです。幾ら皆様方のように個性があって力がある人たちでもサポートが必要だと。

アメリカのシリコンバレーだってたくさんのベンチャー企業が次々と出てきますけれども、そこにはベンチャーエコシステムというものがあって、必ずどこかでサポートしてくれる人がいる。そういうことを考えてみると、子育てをしながら働けるように、我が厚生労働省にお入りになられた方がおられますけれども、両立支援ができるようにさらにやらなくてはいけないし、働き方という意味でも実は会社が変わっても、仕事が変わっても余りハンデにならないという社会に変わらなくてはいけないという意味においては、私は働く方の責任を負っている立場でありますから、これは頑張らなくてはいけないなと思いました。

もちろん、子育て支援、これもしっかりやっていくことが皆様方の人生を豊かにすることになるだろうと思っておりますので、今、加藤大臣と一緒に一億総活躍社会をつくるために何をこれから追加でやらなくてはいけないのか。一生懸命考えているつもりであります。大変勉強になりました。

皆さんが頑張れるように、私たちも頑張りますので、よろしく願いいたします。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

総理からございますか。

○安倍内閣総理大臣 ちょっと質問なのですけれども、多くの皆さんが多くの夢に向かってずっと進んできたと思いますが、青木さんから御紹介いただいた色々なサポートをする場所に行く上において、交通費がない、そういう方たちもいるという話でしたね。そういう人たちはそれがなければずっと家でじっとして、そういう人はいわば家族と一緒に住んでもいない、生活費は全部使い切ってしまったという状況なのですか。

○青木氏 もちろん家族と住まわれている方も中にはいらっしゃいます。ただ、本人を含め家庭状況が大変厳しい状況で、実際に子供の就労への支援のためにお金を使えない、使うことが大変難しいという御家庭のお子さんもしくは若者もいらっしゃいます。

また、親から自立して地方から都心に出てきたのはいいのですが、仕事につくことが困難で、実際に一人で暮らしてやりくりをしているけれども、支援を受ける場所に行くことのコストを払うのが難しい方も両方いらっしゃいます。

○安倍内閣総理大臣 対応としては、しかし、それに対して給付制度をつくっても、その段階で現金を持っていないですから行けないという問題がある。イギリスでは、ニートといった人たちところに出かけて行って話を聞くという制度があります。そういう制度がいいのでしょうか。

○青木氏 実際もちろん訪問をして支援していくということも必要になってくるかと思うのですけれども、その訪問の支援に加えて来たいけれども来られない。仕事をするための努力をしたいけれどもすることができないという層も中にはいらっしゃるの、そちらのコスト面での支援も必要になってくるのかと感じます。

○加藤一億総活躍担当大臣 今の総理がおっしゃった点では、求職者支援制度では受講しているときの交通費を出すとか、そういう制度は実際にある。そこまで行く必要がないといったときにはなかなかないのですが、今の若者たちだけではなくて、私、横浜市のサポステに行ったときにも同じように、そこがアクセスができなくなっているということで、アクセスができることが一つのポイントなのだろうなど。こちらからアウトリーチというのもありますし、そこをかなり意識しなければいけないなと思います。

私の質問なのですが、私も総理もどちらかというと田舎のほうの選挙区なのですけれども、小林さんと坪内さんもそういう地域ですね。地域のコミュニティーがしっかりしているがゆえになかなか新しく入った人か、若い人が動きにくい中で、そういうところで御活躍をされているのですけれども、それを乗り越えるものはどういうところがあったのでしょうか。

○坪内氏 先ほどコンプレックスの話をしたのですけれども、相反する部分で、地元愛はみんな生きている限り、私も子供のいる場所として山口が大事だと思

いますし、守りたいと思って。地元の農業者さん、漁業者さんはなかなか経営の話、数字の話をして会話に通じないのです。ただ、共通言語として私はこの離島のこの田舎の50年後の元気な存続を目指していきたいのだということを持たひたすら最初の1年半ぐらい、声を上げ続けて、経営理念にも50年後の島の豊かな存続と美しい日本食文化を未来に継承しますということ。

○安倍内閣総理大臣 もともと山口ですか。

○坪内氏 私は福井県からのIターンです。

○安倍内閣総理大臣 それで萩大島に。

○坪内氏 はい。でも、私は萩市に住んでいて、子供は明倫小学校、明倫館の藩校のあとに通っているのですけれども、やはり維新発祥の地とか、日本という目線で見ると大事にしないでいけないものだと私は思っているんで、余りよその地がとかは私には関係ないのだということを含めて、私は日本が大好きだからということで、私は海外経験もあったのですけれども、そういったところを言葉にして伝えるということが続けたら、やっと入り込めたかなという感じですよ。

○小林佐知氏 私の場合は、地域おこし協力隊の制度がかなり地域に入る上では助けになっていただいているので、地域に移住された方も他にも何人もいますが、一家族として移住するのと行政の紹介だったりとか、地域の中で主要な役職についている人たちに最初に会えたということがあったので、地域に入る上で仲間に入れなかったとかというのは感じたことはありませんでした。

ただ、農業というと、自分たちの娘、息子たちがやりたくないといって地域から出ている方が非常に多いので、大学を出て本当に農業をやる気があって来ているのかということ、最初は言われなくても、皆さん思っていた部分があったようで、この辺がこの子は本気だなと思ってもらうまでには時間だけというか、何度も何度も通ったり、色々なお話をする中で、1年弱かけてようやく本当にお前に農業を教えるって言っていただけたので、その空白の期間というかその時間の間も支援していただけるような協力隊を含めて、制度があるので、今、単発で移住するよりも地域に入るというのはやりやすくなっているのかと思います。

○加藤一億総活躍担当大臣 残り時間が少なくなってきましたが、せっかくの機会ですから、総理に何かこのように変えてほしいとか、こういう取組をしてほしいということがあればお願いしたいと思います。遠慮なく。先ほどは一つの御提案がありましたけれども。

○安倍内閣総理大臣 清水さんは自動車板金で金メダルをとったと。実際に今、仕事でやっていることと技能五輪で腕を磨いたことはかなり重複するのですか。

○清水氏 今までの話をしますと、仕事自体は技能五輪、自動車の修理を仕事として僕はやっていまして、これからは先行車両の開発の部門の仕事につきまますので、今まで仕事で五輪の関係でやってきたことは、ボディーの構造ですと

か、実際に溶接したりという技能もかかわってくるので。

○加藤一億総活躍担当大臣 せっかくのいいですか。

○安倍内閣総理大臣 須藤さんは、今、就職活動が終わったということですが、これから社会人として一步を踏み出されるのですね。来年の4月からの抱負とか、どういう仕事がしたいとか、まだ配属は決まっていらないですね。

○須藤氏 私は、同じように家庭を持って安定してずっと働きたいと思っていたので、総合職として入社することに決めました。

小さいころから商品企画に携わりたいなという思いがあって、経済学部でマーケティングを学んで、社会でも活かせないかということで歩んできたのですが、やはり会社に入ったら最初は現場を知らなければいけないということなので、お店がたくさんある会社なので、まずは店舗で一旦学んで、10年後には皆さんの手に渡るような商品の企画に携わっていきなりたいなということで考えております。

○水口氏 先ほど申し上げたとおり、私の将来の夢は中南米で新規事業を興すことなので、私も来年から総合商社で仕事をするのですけれども、将来、経営者として海外に行くために必要なスキルであったり経験を積んでいきたいと思っています。

○安倍内閣総理大臣 自分で会社を起こして、中南米で。

○水口氏 事業投資をしたいです。

○加藤一億総活躍担当大臣 最後に子育て中のお二人から何か。

○川崎氏 私は厚生労働省に入省しまして、今、内閣府に出向しているのですが、厚生労働省で多様な働き方、限定正社員などで企業ヒアリングなどをやってみたのですけれども、先進的な取組をしている企業は大手企業には多くありまして、それはトップダウンでやっているケースが多かったです。なので、社会全体でそういった多様な働き方を許容していくのは、企業側のリーダーシップも不可欠になるのではないかと考えております。

○小林陽菜氏 私は大学を卒業してから、先ほども申し上げましたように高校の教員として働いてきまして、生徒が進路で迷った際に私が生徒たちに話しているのは、どのように自己実現をしたいかということをもっと先に考えなさいと生徒たちに伝えていきます。それは私たちの娘が大きくなってから進路に迷ったときにも同じことを伝えたいと思っています。

また、私自身が働いていく中で自己実現ができていくのかということはいつも疑問に思っているところで、特に今、育児休業中なのでこれから先どのような形で働いていきたいかということをもっと模索しているのですが、先ほども申し上げましたとおり企業の育児に対する考え方がもうちょっと変わってくると、女性としても働きやすいのかなと思っています。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

それでは、そろそろ時間ですが、よろしいでしょうか。

では、総理から皆さんにエールを含めて。

○安倍内閣総理大臣 今日1時間という短い時間ではありましたが、皆さんから色々なお話をいただいて、大変新鮮に感じました。私たちが今、進めようしている政策なのですが、失われた20年という話がありましたが、この失われた20年というのはほぼ日本がデフレ期にあった時代で、デフレというのは、給料も下がっていくし、だんだん経済が縮んでいくわけでありまして、特にリーマンショック後にぎゅっと縮んだのです。日本の名目GDP、一時は520兆円を超えたのですが、リーマンショック後470兆円までぎゅっと縮んだのです。それを今、我々が政権を取り返してから3年間で500兆円まで戻しました。

デフレの一番の問題は、何となく無理だねという諦めの気持ちが出てきて、それを前提に考えてしまうということだろうと思います。そこで私たちは、やっとこういう果実ができましたから、この果実を活かしていこうということで、先ほど申し上げましたように、みんなが活躍できる社会の実現の支援として投入していく。そういうことにしようと思っています。

そこで、今までの三本の矢をより強力にしていくということで、日本一大きな経済にしていきたいと思います。人口自体は減っていきますから、みんながもっともっと活躍しないとそれはできないということですから、そういう意味において色々な障害は取り除いていきたいと思います。

同時に、希望出生率は1.8あるのです。希望出生率というのは、みんながきちんと経済的な条件も含めてそろえば子供を産みたいなという人を入れていくと、子供を産みたいと思っている人たちの平均を入れていくと出生率は1.8になっていくのだけれども、現実には1.4。この差を埋めていけば、50年後にも1億人は維持できることになります。

ですから、それを達成するためにも子育ての支援を様々な面から、総合職で働く女性が結婚と出産、子育てと同時にキャリアを諦めない。そういう社会をつくっていくために、待機児童が増えているということで、20万人、40万人を2年、4年で達成していくという話をしまして、これをさらに10万人乗せて、40万人を達成すると待機児童はゼロになる予定だったのですが、働く女性がこの3年間で90万人ふえたものですから、そうすると、さらに需要がふえてしまって、待機児童がふえたという状況になってしまいましたが、これは思い切ってふやしていこう。実際に待機児童ゼロの目標を変えずにやっていきたいと思えますし、中小企業も含めて女性がキャリアも家庭もという希望のある女性はそれが達成できるようにしていきたい。あるいはしばらくお休みして、数年経ってまた帰ってきて頑張りたいという人たちにも色々な研修を受けたりして復帰できるような仕組みもつくっていききたいと思えます。

また、田中さんは職人になりたいと、清水さんからは技能、ものづくり。日本はもともとものづくりが得意な国でありますから、そういう価値をしっかりと活かして、ものづくりだけではなくて、色々な価値が評価される。多様性、

複線化した社会をつくっていきたい。

色々なところに人生の豊かさと喜びがあるわけでありまして、萩の大島というのは私も前に選挙区だったから、今はちょっと選挙区ではなくなってしまったのだけれども、かつて行ったときは、みんなお互いに知り合いで、一番大きな車は軽トラぐらいな感じなのです。でも、みんなお互いに名前呼び合っているという社会であって、そういう社会に住んだことがない人にとっては非常に新鮮だし、そういう生活は新鮮だと思います。そうやって漁師の方あるいは農家の人たちとつき合っていくのは大変だと思いますか、そこから色々な成果を上げていくということは、それぞれの喜びだと思います。

そして、青木さんみたいに何らかの困難を抱えている若い人たちと向き合っている。加えて、日本は何とかやっていくことができるのだらうと思いますが、そういう困難を抱えている人たちのその困難を克服していくということも含めて、一億が活躍できるというようになっていくのだらう。

国家は、皆さんの道を平坦にならすことはできませんけれども、皆さんがチャレンジできる社会をつくることはできるのだらうと思いますので、しっかりと頑張って実行に移す。今日、皆さんから色々なお話を伺って、今後の参考にさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

○加藤一億総活躍担当大臣 どうもありがとうございました。

以上で終了したいと思います。ありがとうございました。

(以上)